

考古資料からみた「天平人の遊び」の復元研究



奈良文化財研究所 都城発掘調査部

研究員 小田 裕樹

はじめに

本研究は、考古資料という過去の人間が遺した遺物を通じて「人間と遊び」という研究テーマに取り組むものである。本研究では今から約1,300年前の古代日本の都であった平城宮・京から出土した遊戯具の集成と観察をもとに奈良時代の人々（「天平人」と遊びとの関わりについて検討をおこなった。

1. 本研究の背景と目的

奈良時代の遊戯具として正倉院宝物の囲碁盤や双六盤が著名である。しかし、正倉院宝物は聖武天皇ら当時の支配者層の遊戯具と位置づけられるものである。下級官人や庶民など階層的に下位の人々も含めた「天平人の遊び」の全体像を明らかにするためには発掘調査で遺跡から出土する考古資料の実態を解明する必要がある。

しかし、出土資料としての遊戯具は発掘調査報告書などで断片的、単発的に報告されるのみで研究対象として取り上げられることは少ない。そこで古代の遊戯史研究を体系的におこなうための基礎的作業として平城宮・京出土遊戯具を集成すること、各遊戯具を観察し考古学的特徴を整理すること、関連資料との比較を通して当時の遊びの実態を明らかにし、歴史的な位置づけを試みることを目的として本研究を実施した。

2. 研究の資料と方法

本研究は遺跡から出土する考古資料を対象とする。具体的には、双六盤・囲碁盤・樗蒲（かりうち）盤・サイコロ・「算木状木製品」などの盤上遊戯に関する遊戯具を主たる対象とした。

また本研究では平城宮・京から出土する木製品・土製品の中から遊戯具・遊戯関係資料を抽出し、これらの集成をふまえた上で各資料の実見・観察をおこない、奈良時代における遊戯・遊戯具に関する考古学的検討をおこなった。

3. 研究の成果

(1) 平城宮・京出土遊戯具の集成

平城宮・京出土遊戯具としてサイコロ、樗蒲（かりうち）盤、碁石、算木状木製品、独楽、木トンボ、木球、毬杖などの資料を集成した。これらの資料のうち、未報告資料については実測図作

成や写真撮影などの資料化をおこなった。

(2) 出土資料の観察・検討

ここでは双六（盤双六）と樗蒲（かりうち）に関連する資料について取り上げる。

サイコロについて 平城宮・京から出土する代表的な遊戯具としてサイコロがある。サイコロは円錐から立方体タイプと棒状タイプの2タイプが存在する（図1）。

立方体タイプ（1～6）は現代のサイコロと同じ正六面体の形態を呈し、先端の鋭利な工具で目の数を刻す点や、木材の端材を利用した簡易な製作が特徴である。正倉院宝物の立方体サイコロは象牙製の精巧な作りであり、中国からの将来品であると評価されている点とは異なる特徴をもつ。

棒状タイプは側面を削り出した角柱形態を呈し、六角柱や八角柱の各面に漢数字を墨書するものや刻線を施すものがある（7～10）。また、平城宮・京から刻目や墨書のある角柱状の形態を呈する木製品が出土しており（11～19）、改良型の算木と考えられている。しかし、この「算木状木製品」は、①面取りにより角柱状を呈する、②刻線や墨書による各面で異なる表示・記号が存在する、③両端が角錐状を呈するタイプと平坦なタイプがある、④長さ・大きさが多様である、という4つの特徴がある。これは上述の六角柱や八角柱の棒状サイコロと共通する特徴であり、これを4つの采の目を表すサイコロとみても問題はない。この木製品が算木であるならば刻み目は不要であり、両端を角錐状に尖らせる必要もない。中国唐代の墓からサイコロとして同様の角柱状遺物が出土している点をはじめ世界各地に四角柱状のサイコロが存在する点もふまえると、この木製品は棒状タイプのサイコロの一種とみなすべきと考える。

なお、これらの立方体タイプと棒状タイプのサイコロが同じ遊戯に用いられたものかどうかは検討の余地がある。立方体タイプのサイコロが盤双六で使用されていたことについて疑いはないが、棒状タイプのサイコロは現代には伝わっていない未知の遊戯の存在を示唆する。今後さらに検討を続けたい。

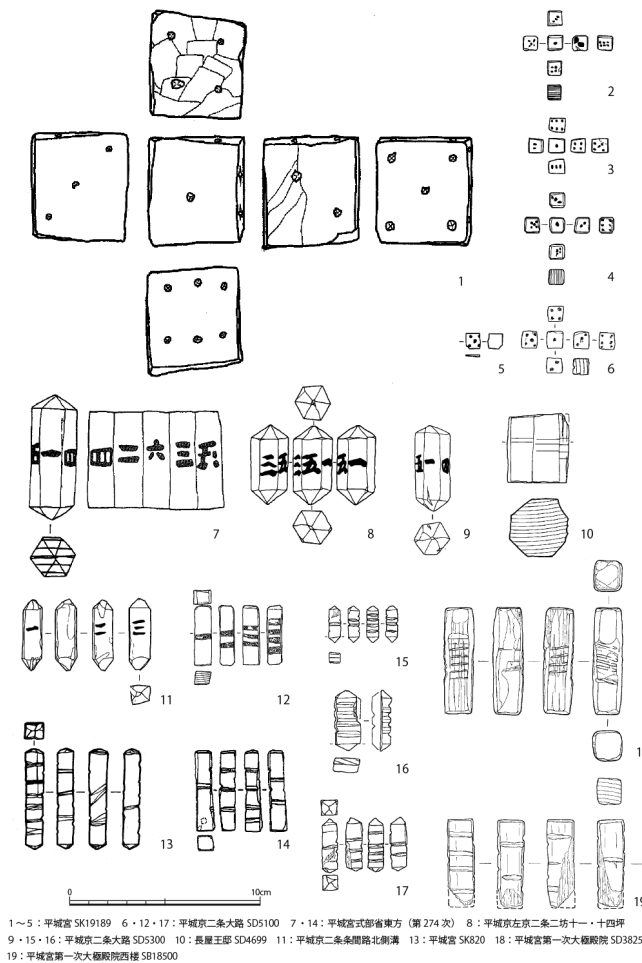


図1 平城宮・京出土サイコロと「算木状木製品」 1:4

かりうち盤について 報告者以前、平城宮・京をはじめとする古代の土器や木器などに記された円形の列点記号(図2)が古代の盤上遊戯である「樗蒲(かりうち)」の盤面であることを明らかにした(小田2016)。これは、列点記号が現代韓国で遊ばれている「ユンノリ」盤面と近似することに注目し、「万葉集」の研究成果から奈良時代にユンノリに似た盤上遊戯「樗蒲(かりうち)」が存在すると推定されていたことをふまえたものである。

本研究による出土資料の見直しの過程で、さらに新たな一例を加えることができた(図2-8)。報告者はかりうち盤の考古学的特徴として「器物を転用して記号を記す」「記号の施文対象・方法に規則性がない」「都城・官衙遺跡から出土する」の3点を示していたが(小田前掲)、本資料はこれの特徴もあてはまり、報告者の見通しを進展させる新資料といえる。

4. 「天平人の遊び」について

本研究で平城宮・京出土遊戯具について以下の知見を得た。

- ① 奈良時代の平城宮・京出土遺物の中には遊戯に関わる多様な遺物が存在している。
- ② 現代まで残る(あまり形が変わっていない)遊戯具と現代にはない遊戯具がある。

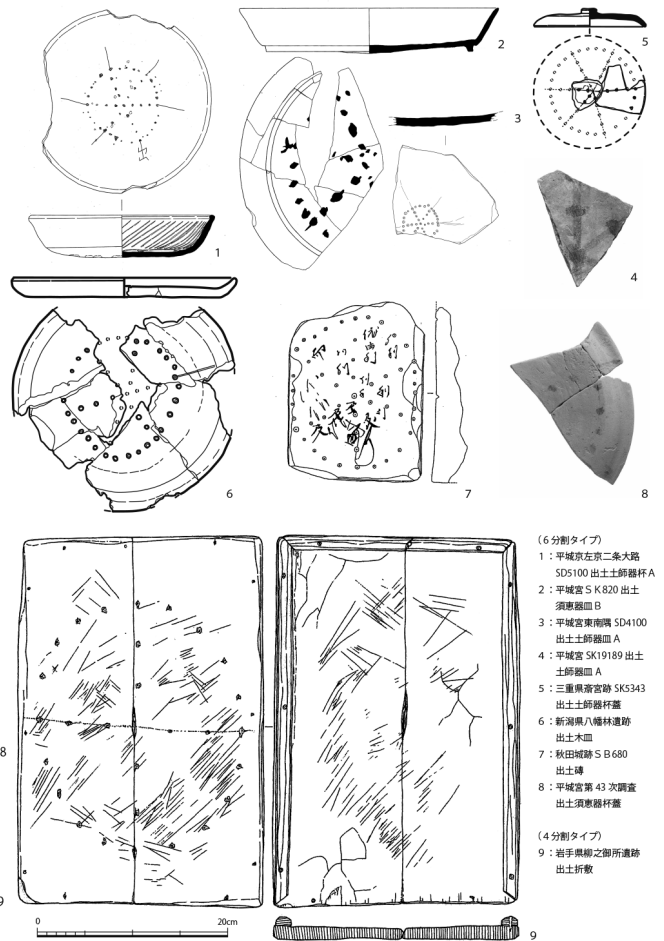


図2 出土樗蒲(かりうち)盤 1:8

- ③ 出土遊戯具には簡易な材料・方法で製作されたものが多い。
- ④ 出土遊戯具の形骸は同時代の中国・朝鮮半島と同様のものがある。

従来、奈良時代の遊戯具の代表例として正倉院宝物が取り上げられてきた。しかし、本研究により平城宮・京では樗蒲(かりうち)や棒状サイコロを使用する遊戯をはじめ多様な遊びがこなわれていたことが明らかになった。これらの遊戯具は身近な材料を簡易な方法で加工して製作しており、これらの遊戯が手軽に遊ばれるほどに普及していたことが推測できる。

また、これらの遊戯の多くは中国・朝鮮半島に由来しており、当時の文化交流の一端を示すと考えられる。奈良時代は唐の律令制度を受容し、律令国家の体制整備が進められた時代にあたる。遊戯・遊戯具にみられた大陸由来の特徴も中国・大陸文化の積極的な受容という当時の時代背景を反映している可能性が高い。

本研究は奈良時代の都である平城宮・京出土資料の基礎的な集成・観察と研究課題の整理に留まるものである。引き続き考古学的分析や関連資料の比較研究を進め、列島内における奈良時代の遊びの全体像の復元と古代から現代に繋がる「日本人と遊び」の歴史的変遷について研究を進めたい。

文 献

小田裕樹 2016 「盤上遊戯「霧蒲（かりうち）」の基礎的研究」
『考古学研究』 63-1